

愛知県吉良町金蓮寺の『大般若経』

小 山 正 文

一

愛知県幡豆郡吉良町の金蓮寺は、饗庭のお不動さんとして近在に親しまれ、また県下最古の国宝建造物弥陀堂を有する寺としてもすこぶる有名であるが、しかし、同寺に室町時代の『大般若経』六百巻近くが所蔵されている事実を知る人はきわめて少い。それがあまり知られなかった理由は、経巻の傷みが甚だしいため寺では経箱に収納したまゝ一般公開しなかったからであるが、ふとしたことから本経の存在が町文化財保護委員の耳目に止り、昭和五十二年秋初めて本格的な調査が行われることになった。その結果、本経は室町中期（十五世紀前半）の応永から永享にかけ書写された『大般若経』の貴重な写本であることが判明したのである。そこで町でも翌五十三年一月これを文化財に指定し保存をはかっていたが、以下、本写経の概要とその貴重性を記し、あわせてこれが県の文化財にも指定されるよう望みたいとおもう。

二

周知のように『大般若経』は、具名を『大般若波羅蜜多経』とい、般若波羅蜜すなわち智慧・到彼岸の義を説く経で、般若（智慧）より見れば一切の存在はすべて空であるとする空観思想が述べられており、中国唐代の有名な三蔵法師玄奘（六〇二―六六四）によって漢訳化された六百巻もの膨大な経典である。

我が国へは訳出間もない八世紀前半の奈良時代に早くも本経が渡来し、爾後、功德利益の広大な仏典として盛んに真読、転読、書写、版行が行われ、今日に至るまで根強い『大般若経』信仰を形成しているのである。

金蓮寺所蔵の『大般若経』もそうした所産のひとつに他ならないが、本経は同寺絵馬堂の壇上向かって左に置かれた比較的新らしい妻入り造りの経箱へ六列にうず高く積み重ねて納められ

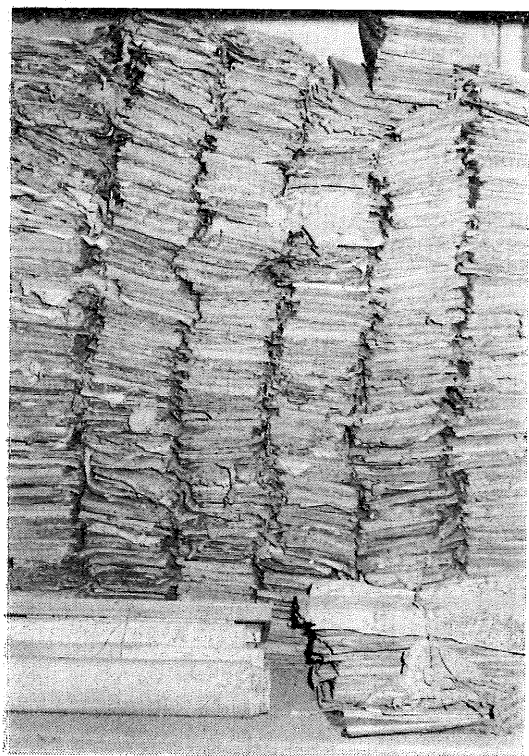


写真 1

ており（写真一）、箱の前には「大般若經頼朝公御真筆」と墨書した木札が掛けられている。この源頼朝自筆のことについては、江戸中期の『金蓮寺縁起』にも次のごとく見えており、享保十七（一七三二）年頃すでにそうした伝承のあったことが知られる。

大般若經

頼朝公御自筆為当山第一之什宝也卷々終記源頼朝并家臣藤九郎盛長於当山書写之也往古全部六百帙周備由經多年之星霜而闕本過半惜哉現住定天菅非憎闕失錯亂歎其難為転読卷舒也是以享保十七壬子年勸遠近之緇素補之六百卷全部矣冀年々無怠慢於不動尊前奉転読者也

本經は、しかし、前述のごとく源頼朝没後二百年ほどを経過した応永頃の写經であるから、とうてい頼朝自筆説は信じ難いわけであるけれども、こゝで注意したいのは、『縁起』にいわゆる頼朝自筆本は多年の間に惜しくも大半が闕失錯亂してしまい、住職の定天が新たに六百巻を補ったといっている点であろう。

すなわち、金蓮寺には享保十七年に補入された現在の『大般若經』以前に、源頼朝自筆の伝承を持つ古い『大般若經』が蔵せられていたのではなからうか。実はそのことを考えさせるに示唆的なひとつの史料がある。

それは幡豆郡幡豆町小野ヶ谷竜藏院に蔵せられる平安時代の『大般若經』端本であって、『愛知県幡豆町誌』によれば、同院には長寛二（一一六四）年、正嘉三（一二五九）年、永正十三（一五一六）年などの識語を有する

『大般若経』が二百巻ばかり蔵せられているという。このうち永正十三年の端本は、後に見るごとく明らかに現在の金蓮寺本『大般若経』と一連のもので、おそらく同寺よりの移入品であろう。そのとき長寛二年の識語を有する『大般若経』の一部も竜蔵院へ渡されたのではなからうか。これこそが源頼朝自筆の伝承をもつ（長寛二年は頼朝十八歳に相当するが、もちろん頼朝の真筆ではない）金蓮寺旧蔵の古い『大般若経』でなかったかと考えられるのである。なお、竜蔵院『大般若経』の正嘉のものは、「於三州真福寺西谷書写 金剛仏子覚円聖淨房」とあるごとく、年代的にも場所的にも金蓮寺経とは関係ないものである。

さて、それはともかく、このたび調査が行われた金蓮寺の『大般若経』は、永年の転読によって紙質も脆弱化し、糊離れした箇所も非常に多い上、湿気、虫喰による損傷も相当進行してかなり危険な状態にあるが、料紙は縦二六・二センチの黄色味を帯びたあまり上質でない室町時代の典型的な写経紙で、薄手と厚手の二種類がみられる。これに幅一・八センチ、高さ二一・五センチの界線を引き、通例のごとく一行一七字、一頁五行あて写経し、巻首と巻尾に「大般若波羅蜜多経卷第一」以下の首題と尾題とを置く。

装幀は全巻折本となっているが、これは後世転読に便利なよう改装された結果であって、当初は卷子装であったこと巻尾料紙の上下を斜めに裁断し軸を取り付けた糊代の痕跡が残っていることによつて疑いない。

写経の書体は、奈良平安時代に見られるような謹厳優美なものでもなく、鎌倉時代のごとき力強さもないきわめて庶民風の筆体で、かつ大勢の人が書写に参加しているのを特色としているが、これまた時代性をよく示しているといえよう。

本写經の正確な現存卷数は、前記のような甚だしい傷みからいまだ擱まれていないが、残存分量より推すと優に五百卷は越えるごときで、復原修理の行われた暁には、おそらく六百卷に近い数が出るものと期待される。

なお、本經の復原は一見難物のように考えられようが、しかし、幸いにも行字詰が版本と同様一行一七字で写經されているから案外容易なのではないかとおもわれる。六百に近い卷子本がずらりと並んでいるさまは、さぞ一偉觀に違いなく、その速やかな復原修理を願わずにはおられない。

ちなみに、本写經の若干卷は、現在豊田市如意寺、幡豆町竜藏院、兵庫県村手家、吉良町花岳寺（今亡）などにも所蔵されている。

三

金蓮寺『大般若經』の貴重な点は、残存卷数の多いこともさることながら、それにも増してさまざまな識語が卷輿に記されている事実であろう。こうした各卷の識語類を調査することにより、本写經の由来、書写年月日、筆者、写經場所、真読校了の年月日、真読の場所、真読僧の名前や生国等々が判明するのであって、結局、さして珍らしくもない『大般若經』の価値は、かかる識語の有無によって決定されるといっても過言ではないのである。

ところで、その金蓮寺『大般若經』の識語であるが、本經の場合は年号別に見て次の四つに分類することがで

きよう。すなわち、

- (A)、応永年間のもの
- (B)、永享年間のもの
- (C)、永正年間のもの
- (D)、大永年間のもの

これらの年号は、(A)から(D)まで百二十年以上に及ぶものゝ、全て足利將軍室町時代のものばかりであることが、まず注意されよう。

このうち(A)は、第一一二巻の応永十三（一四〇六）年五月を初見とし、以下、第八九巻に見える同三十五（一四二八）年間三月のものまでが多数知られ、もって本経全体の書写がおよそこの間に行われたことを推測せしめるのである。今その応永年間の識語を数例示してみる（以下所蔵者の記載ないものは、すべて金蓮寺蔵）。

（第一一二巻）

応永十三年 丙戌 五月日

賀茂庄於長善寺書写早

(第四一〇卷 花岳寺旧蔵)

応永十九年二月十二日酉刻

於金星山懸存拜書了

今月九日於八幡山西条勢六人打死

(第五二〇卷 花岳寺旧蔵)

応永二十年六月一日申刻拜書了

於金星山中校合学菩薩行比丘懸存

今月今日華藏寺鎮守立柱

(第三一〇卷)

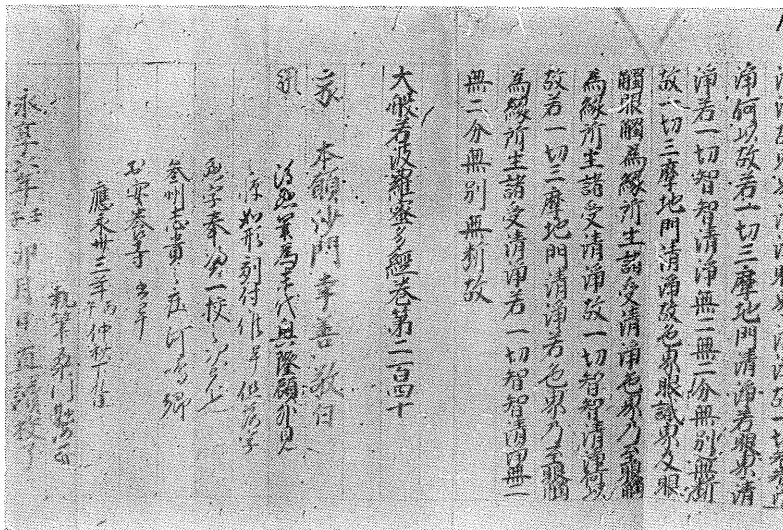
応永三十三年八月一日

尾州愛智郡新長谷寺

(第二四〇卷) (写真二)

雖惡筆為末代興隆願外見

愛知県吉良町金蓮寺の『大般若經』



愛知県吉良町金蓮寺の『大般若経』

之憚如形列付候早但落字

悪字奉憑一校之次者也

参州志貴之庄河嶋郷

於安養寺書早

応永卅三年丙午仲秋下九日

執筆桑門融海房

(第八九卷 如意寺蔵)(写真三)

応永三十五年戊申壬三月三日申刻

拝書了 釈慧存(花押)

以上の例示によっても分るとおり、『大般若経』は大部な経であるから、ほとんどの場合筆者も筆写場所も異なるのが普通で、巻の順序も前後まちまちに書写されることが多い。がしかし、その写経の中心的人物すなわち願主に相当する人が必ずいるのであって、本

眼觸為縁所生諸受可得非眼果真如中如
来真如可得非如来真如中眼果真如可得
非色界乃至眼觸為縁所生諸受真如中如
来真如可得非如来真如中色界乃至眼觸
為縁所生諸受真如可得非眼果法性中如
来法性可得非如来法性中眼果法性可得
非色界乃至眼觸為縁所生諸受法性中如
来法性可得非如来法性中色界乃至眼觸
為縁所生諸受法性可得
大般若波羅蜜多經卷第八十九

應永三十五年戊申壬三月三日申刻拜書了

釋慧存

本願沙門幸善敬白
永享年壬子二月日 貞讀校了

写経ではそれが第八九卷、第一六四卷、第四一一卷、第四六三卷、第四六五卷、第五一五卷、第五二〇卷、第五四五卷などに見られる金星山華藏寺の慧存と目されるのである。慧存についてはあまり詳らかでないが、彼が華藏寺に住したかぎり臨済宗の禅僧であろうことは想像に難くない。はたして応永十六（一四〇九）年に京都東福寺普門院の住持であった方秀（一三六三—一四二四）が製書せる「三川金星山華藏禅寺転不退法輪藏記」（『五山文学全集』第三輯所収の『不二遺稿』に掲載）にも慧存の名が見えており、彼が華藏寺の禅僧であったことは疑う余地がない。

三川金星山華藏禅寺轉不退法輪藏記

吾佛之道。微妙不可思議。雖不即乎文字紙墨。而不離乎文字紙墨之間也。或即也。或離也。則其道幾乎息矣。昔摩騰法蘭入漢以來。至楊隋之世。僅五百餘年。經律論藏徧布天下。其間得道者亦不尠焉。然其條分大小。縷析偏圓者。莫若乎天台顓師。顓師以五時八教判釋東流聖教。罄無不盡。後世取法焉。其不即不離之道。亦如指諸掌。比丘惠壽番易人也。從予遊者有年。應永己卯秋。挈包往金星山。以居。山即佛海入滅之地。晨香夕燈。壽不敢怠。逾十一年而來。凌霄而言曰。壽猥得出家。耻無自効。以故甲申歲。就山中開啓華嚴道場。與同侶惠存等。披大藏經。逐部各修十法行。日惟不足。則繼以夜。今茲既書一藏。仍又造殿以奉此經。其排函目。一依天台時教。

之次。而除重譯者。凡三千餘卷。彫粧釋迦八相。以妥經藏八方。其八相即取諸志磐本紀。敝殿東榮。施長連床。爲修禪思惟處。而殿屋上即安一級圖圓。以表斯會攝乎法界也。壽等俱共於佛前自誓謂。我等世々生々。遇諸佛教修如是行云爾。初罄已所畜無盡財庫。差人管之。子母滋生。以備四事之須焉。其自啓塲訖造殿。其費無慮幾萬錢。或用庫中子錢。或復哀四方施者。巨海濃州省柔。割膏腴若干畝。以歸於寺。裕衆食。其志可尙也。是故作財法檀度之像。列乎殿上。各有推挽之勢。轉於經藏。儼乎凜然。足可視也。願師紀其事。俾永々不墜也。予曰。公即象季精進。懂也。双林大士創轉輪藏。蓋爲不暇誦經。及不識字者設。而誓曰。有三登吾藏門者。生生不失人身。乃至有能轉不計數者。功德即與讀誦一大藏經正等無異。矧今能受持。能讀誦。能書寫。能思惟。能爲人解說。其功德固不可勝計者乎。若夫使天下後世學者。亦求至道於文字離即之表。悟妙理乎周旋回繞之間。一旦豁然撥轉一機。則乾覆地承。乃是函蓋也。南極北辰。乃是樞軸也。日出東月生西。無非修多羅藏也。雨滋草霜枯木。無非毗奈耶藏也。晨鷄角々夜犬嗥々。無非阿毗曇藏也。而後吾人一動一息一語一默。乃至飢而食。渴而飲。熱則搖扇。寒則襲衣。莫不悉修彼十法行者也。當爾之時。騰躑亦不可翻譯也。天台亦不可判釋也。豈可藏而殿輪以轉之者哉。公持此語。往叩佛海於大寂定中。佛海亦必當首肯。其列殿者。吉良源義尙外護吾法者。巨海

省柔。大河内省貞捨田於寺者。比丘尼惠林久柏堂。近事女瑞貞。皆是隨喜樂施。不敢慊財者。比丘道助管無盡財庫者。惠存正湖現雪精十行者。惠壽即藏塲主。策進衆僧。凡幹斯會之事者。初受業參無參。典賓惠山。後見語心椿庭。椿庭器許。乃字願石。年今四十二歲。應永龍集己丑如來解制日。京東普門住持釋方秀製并書。壽遂刻之石。仍具施財名銜於石陰。

右の「転不退法輪藏記」を書した方秀は、五山文学史上著名な僧で、『本朝高僧伝』卷第四十にその伝が載せられているが、右の「転不退法輪藏記」によれば、方秀には渡来僧の惠寿なる弟子がおり、この惠寿は応永六（一三九九）年に金星山華藏寺へ入り修行を怠らなかつた。しかるところ惠寿は同十一（一四〇四）年に、同侶の惠存などとともに大藏經十法行を修めたというのである。この同侶の「惠存」こそが、とりもなをさず『大般若經』の「慧存」に他ならないであろう。

惠寿が中心となつて行つた大藏經十法行というのは、經典の一部づつを能く受持ち、能く誦誦し、能く書寫し、能く思惟し、能く人の為に解説する最高の功德行であるが、惠存がこの行に参加したことが機縁となつて、『大般若經』六百卷の写經を発願したと推察するのもあながち荒唐無稽な論とはいえないであろう。したがって金蓮寺の『大般若經』は、もと華藏寺に伝えられていたものが、『金蓮寺縁起』にも見えるごとく、享保十七（一七三二）年に同寺住職定天により移藏されたとみるのが妥当なのではあるまいか。そのことは『大般若經』に金星山華藏寺

慧存の名が認められることのほか、本經の永正十（一五一三）年真誡が、華藏寺のある岡山八幡宮で行われていること、金星山華藏寺山内の花岳寺に大正末年まで本寫經の一部が伝えられていた事実等によっても、十分首肯されるであろう。

ところで、右掲の応永識語で特に興味ひかれるのは、第四一巻に記される「今月九日於八幡山西条勢六人打死」という記事であろう。これは当時対立を続けていた東条・西条両吉良氏合戦の模様を慧存が見聞のまゝに書き付けておいたものであるが、今となつては貴重な史料といわねばならない。また第五二〇巻の「今月今日華藏寺鎮守立柱」なる記録も、当時の實際を伝えるものとして重視されよう。その他、本寫經の筆寫場所である賀茂庄長善寺、愛智郡新長谷寺、志貴庄河嶋郷安養寺の記載も、これらの寺々が現在定かでないだけに貴重視したい。

四

次に(B)の永享識語をみたいが、これは永享二（一四三〇）年のものと、同三・四（一四三一・二）年のものゝ二つに分けて見てみる必要がある。

そこでまず永享二年の識語であるが、これは上に見た応永年間の寫經の続きとみなすべき性質のものであることは、次の例によつても明らかであろう。

(第五九七卷)

永享二年 戊庚 五月八日

寛誉

(第五九四 如意寺藏)

永享二年 戊庚 六月一日 滝巖坊

寛誉書之

(第五八〇卷)

祟永享第二曆上韋闍茂季秋仲九日書于

三州路大浜郷竜泉寺 寄居苾芻某暮齡七旬

すなわちこれら識語の永享二年は、前記の応永識語最後のものである同三十五（一四二八）年の翌々年に当り、かつ書きざまからも写経を意味していることは疑いない。そうなると、識語の示すところ本写経は応永十三（一四〇六）年より永享二（一四三〇）年まで四半世紀は続いたこととなり、六百巻の『大船若経』写経が、いかに難事業であったかを理解することができよう。なお、永享二年経の筆写場所である滝巖坊、大浜郷竜泉寺もこれまた現

在明らかではなく、応永年間の筆写場所と共に今後の究明がまたれる。

かくて二十五年を要し大願成就された本経は、その後盛んに真読（經典の文句を省略せずに全部読むこと）、転読（大部の經文の初・中・終の要所たる教行、または題目と品名とだけを読むこと）に供されるわけであるが、早くも翌永享三年から同四年にかけ沙門幸善なるものが最初の真読を行った。それがいまひとつの永享識語に当るものである（写真二、三参照）。すなわち、

（第一九卷）

本願沙門幸善 敬白

永享三年十二月日 真読校了

（第二三卷）

結縁長永寺

本願沙門幸善 敬白

永享三年 十二月日 真読校了
亥^辛

（第六一巻）

本願沙門幸善 敬白

永享_三年_{壬子} 正月日 真読校了

(第一二一卷)

本願沙門幸善 敬白

永享_三年_{壬子} 二月日 真読校了

(第二七四卷)

(梵字) 本願沙門幸善 敬白

永享_三年_{壬子} 三月日 真読校了

(第四三〇卷)

(梵字) 本願沙門幸善 敬白

永享_三年_{壬子} 六月日 真読校了

このように本経最初の全六百巻の真読は、幸善によって永享三（一四三一）年の年末から始められ、翌四年の秋

頃まで続けられたようであるが、この間彼は真説を進めながら本文の校合も行っていたこと、「真説校了」の文字によって窺知され、幸善の真説はそのまゝ本写經の完全終了を意味するものとなろう。

第二三卷に「結縁長永寺」とあるのは、その卷の真説に長永寺の住侶も同席したことをいうのであろうが、それは単に読誦を共にしたゞけではなく、むしろ幸善の真説に対し長永寺の衆徒が『大般若經』の料足を出したものと解すべきであらう。この長永寺がいかなる寺であるか知らないが、右の記載は『大般若經』真説の經濟的一面を示すものとして看過すべきではない。

真説に当った幸善については、このすぐ後に出てくる永正年間の円海や大永年中の安心と共に不明であるが、彼等はその頃諸国を遊行經回した勸進聖の一人でなかったかと推測したい。そのへんについては後に触れるところであらう。

この幸善の真説後、本經は絶えず転説に用いられたことはいうまでもなからうが、その結果、写經の一部が傷んだり、あるいは貸し借りなどされている間に、大部な經のことゆゑ失われる卷も出てきたのであらう。(c)の永正年間の識語のひとつが、すなわちその補写を意味するものである。よって項を改めそれをみていくこととしたい。

五

永正年間の識語は、永享のそれと同様やはり書写と真説の二つに分類して觀察するのが望ましい。この場合の書写は前述のごとく補写を意味するのであるが、写經されて日なお浅いため失われた經卷はそう多くなかったとみ

え、補写の識語は極めて少い。補写は永正五（一五〇八）年周善なる者によって、もっとも傷み易い第一巻から始められているが、この周善はあるいは前にみた幸善と関係があるのであろうか。もっとも幸善の永享三（一四三二）年と周善の永正五年とでは、その間七十五年以上の開きがあるから、二人は師弟の間柄とは想定しがたく、孫弟子あたりに相当するのかもしれない。いまこの周善による永正五年の補写識語を掲げるならば次のようなものである。

（第一巻）

于時永正第五戊辰 晩夏上旬日

筆者周善謹書之早

永正年間の識語は、むしろ次下に述べる円海の真読をこそ注目すべきであろう（写真四）。

金蓮寺の『大般若経』は、既述のごとく慧存によって発願せられ、応永十三（一四〇六）年から永享二（一四三〇）年まで写経が続けられたのであるが、それが完了して間もなく、永享三（一四三一）年から同

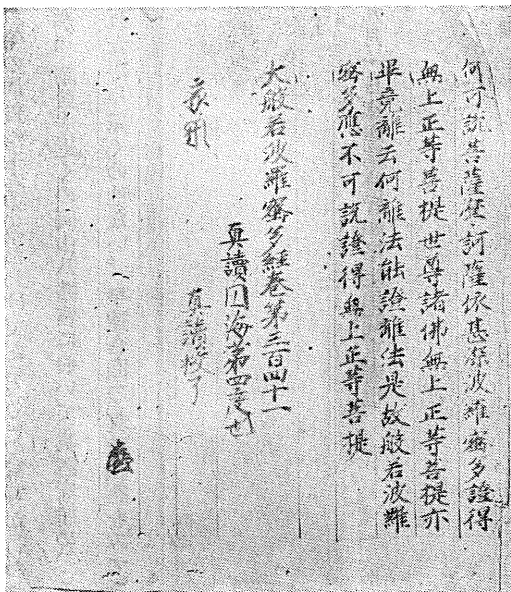


写真 4

四年にかけ幸善の真説があり、ついで永正五（一五〇八）年の周善の補写をみたわけである。この補写が行われたと同じ永正の十（一五一三）年に關東出身の円海なる僧が、華藏寺近くの岡山八幡宮において真説を始め、それが実に永正十三（一五一六）年まで前後七回も繰り返されたから驚くのではない。早速各回の真説識語をみてみよう。

（第五八四卷）

（梵子）奉真説永正十年西癸八月廿七日 円海了

於岡山八幡宮奉真説大般若經一々自六月二日九月一日迄奉精修旨如形生國關東者也

（第一九卷）

奉真説此經ニテ二度永正十年西癸霜月四日 円海

（第二九六卷）

永正十年西癸十二月五日真説円海第四度也

（第五八卷）

永正十一年戌甲霜月廿五日真説円海五度也

(第一六〇卷 竜藏院藏)

奉真読永正十三年子丙 六月八日 円海七度也

六百卷からなる『大般若経』をかくも幾度となく円海が真読せざるをえなかった背景に、われわれは激動して止まなかった戦国時代の世相を考慮してもいいであろう。この時にあたり円海が神仏に祈請したものは、やはり「仏法興隆、天下泰平、五穀豊饒、息災延命、武運長久」といういつの時代も変らない世間一般の切実な願いであったのではないだろうか。かかる願いを込めての真読が、回を重ね真剣であればあるほどに、庶衆はこぞって真読僧（円海）と真読が修行される寺社（華藏寺、岡山八幡宮）へ浄財を喜捨したに違いなく、実は『大般若経』の書写、真読、転読の行われる裏面に、このような僧や社寺の経済問題が深くかかわっていたことを見逃してはならない。そしてその真読を行う僧が、円海もみずから「生国関東也」と記しているごとく、多くの場合、他国者であったことがこれまた注目されよう。すなわち彼等は、諸国流浪の名もなき聖（ひじり）であったとおもわれるのであるが、かかる無名の下級僧侶が無数にいたからこそ、仏教は全国津々浦々にまで広められ、直接庶民に手渡される結果となったわけで、したがって尊き聖はその土地々々の寺院や神社で手厚くもてなされるのは当然であった。おそらく前にみた幸善も、この円海も、また次に述べる安心も、全てそうした一所不住の遊行僧であったとおもわれるのである。

このように三河の一地方で成就された『大般若経』にも、日本古来の庶民仏教が力強く息吹いていることが看取

され、そうした面でも本写経の重要性が十分認められるのではないかとおもふ。

六

円海が真読を行った永正は、その十八（一五二一）年に大永と改元されるが、この大永七（一五二七）年に今度
は生国美濃の安心という僧が、二度目の真読を成し遂げている。これが最後④の大永識語であるが、大永七年とい
えば、その三月に伊文神社（西尾市）、四月に久麻久神社（同市）、十一月に桜井神社（安城市）の各造替が行われ
ており、金星山華岳寺薬師堂の鰐口も同年四月に造られるなど、安心の真読もこれらと関係深いことを思わせるの
であって、おそらくこうした事象の背後には、戦国乱世時代における三河の名門吉良氏の戦勝祈願が込められてい
るのであろう。それでは次にその安心の大永識語をみてみることにしよう。

（第五九四卷 如意寺蔵）

（梵字）奉信読大永七年丁亥 卯月廿日 安心叟 生国美濃 真読二度

（巻数不明）

（梵字）奉信読大永七年丁亥 卯月吉日 安心叟 生国美濃也

(第五四一卷)

奉信誦安心叟了

安心は「真誦」をことさら「信誦」と記し、また梵字も麗々しく冠書するなど、そこには永享の幸善や永正の円海を意識しての仕業とおもわれるものがあり、彼の個性が遺憾なく發揮されていておもしろい。やはり安心も前述のごとく幸善や円海同様『大般若経』の真誦を専門とする般若聖（はんにやひじり）とでもいうべき遊行僧なのであろう。寺社では彼等を迎えて『大般若経』の真誦を修行することにより、庶衆からの淨財が期待でき、また世間では遠国の尊き聖が真誦を始めたとなれば、利益も廣大無辺と門前市をなしたに相違ない。

周知のように我が国日本仏教は、多数の高僧、名僧、知識を生んだが、しかし、それらはあくまで花であり実であって、その幹や根として活躍した名も無き聖の群れを忘却すべきではなからう。彼等下級僧侶は庶民と密着し、庶民のためにありとあらゆる作善を行うのを常とした。『大般若経』六百巻の書写、真誦、転誦もまさにそうしたものに他ならない。

かかる観点より、このたび調査の行われた金蓮寺の『大般若経』を眺めてみるのも興味ぶかいのではなからうか。そこにはまさしく生きた三河の中世庶民信仰を捕えることが可能であり、それはそのまゝ得難き地方仏教史料ともなるものであろう。本経の存在がそうした意味からも、今後さらに重視されるようになれば幸いである。

最後に以上みてきた金蓮寺本『大般若経』の識語を年表風に整理し本稿の結びとする。

応永十一（一四〇四）年

慧存、金星山華藏寺にて大藏經十法行を修す。

応永十三（一四〇六）年

この頃より『大般若経』書写始まる。

永享二（一四三〇）年

この年までに六百巻の書写を終える。

永享三（一四三一）年

幸善真読を始める。長永寺これに結縁。林総左エ門、佐々木甚五信広も武運長

久を願い同じく結縁施主となる。

永享四（一四三二）年

幸善真読を終える。

永正五（一五〇八）年

周善『大般若経』の補写をする。

永正十（一五一三）年

円海、岡山八幡宮にて真読を始める。同年中に四度真読を行う。

永正十一（一五一四）年

円海、第五度の真読を行う。

永正十三（一五一六）年

円海、第七度の真読を行う。

大永七（一五二七）年

安心、二度目の信読を行う。

享保十七（一七三二）年

金蓮寺住職定夫、『大般若経』六百巻を補い不動尊前にて転読。

明治五（一八七二）年

金蓮寺十三世徹玄道大和尚、『大般若経』の整理を行う。

昭和五十三（一九七八）年

金蓮寺『大般若経』吉良町文化財に指定さる。

〔付記〕

右は昭和五十三年四月の調査資料をもとに執筆したものであるが、その後『円空研究』第八号に発表せられた平松令三氏の「志摩片田の大般若経をめくって」を読んで、いろいろ啓発させられるところがあった。

特に金蓮寺経も志摩庄田のそれと同様、種々の大般若経が混じっていて複雑な様相を呈していることの解釈に、筆者も苦慮しいちおう補写されていたのであろうと考えておいた。ところが平松氏は、経本再生を商売のようにする勸進聖がいた結果でないかという新説を提唱されるほどと思った。大般若経の使用は激しかったから、当然そういうことも考えられるし、金蓮寺経に出てくる周善、円海、安心なども単に真説だけではなしに、そういう商売をも兼ねた聖であったかもしれないことを付記しておきたい。